

**令和元年度教育事業 環境教育学習プログラム開発事業
「子ども環境探検隊・栗駒山麓ジオパーク編」**

- 1 趣 旨 花山青少年自然の家の周辺フィールドにある豊かな自然のもと、自然体験活動を通じて、自然の仕組みについて理解を深めるとともに、その保護や活用について考え、地域に根ざした環境教育の推進を図る。
- 2 主 催 独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国立花山青少年自然の家
- 3 共 催 栗駒山麓ジオパーク推進協議会
- 4 後 援 宮城県教育委員会・栗原市教育委員会
- 5 協 力 秋田県湯沢市ジオパーク推進協議会
- 6 事業の概要
 (1) 期 日 令和元年9月21日(土)～23日(月・祝)〔2泊3日〕
 (2) 参加者
 ①参加対象 宮城・岩手県内の小学校4年生から6年生 25名程度
 ②参加状況 参加総数24名(応募者数 41名)
- 6 場 所 国立花山青少年自然の家 及び 栗駒山麓ジオパーク(ジオサイト)
 ゆざわジオパーク(ジオサイト)
- 7 講 師 栗原市役所 栗駒山麓ジオパーク専門員 田中 誠也 氏
 栗駒山麓ジオパークガイド 佐藤 鉄也 氏
 湯沢市産業振興部観光・ジオパーク推進課
 ジオパーク推進班 班長 佐藤 誠 氏
 湯沢市ジオパーク推進協議会専門員 伊藤健太郎氏

8 企画・運営のポイント

ジオパークのフィールドと人々の営みを結びつけた学びとして企画した。前回までの「栗駒山麓ジオパーク」に加え、隣接する「湯沢市ジオパーク推進協議会」とも連携を図ることとした。岩手宮城内陸地震での被害の大きさや栗駒山麓の地形や地質、火山活動が人々の生活(産業)とどのように結びついているのかについて学ぶこととした。また実際にジオポイントを見学することで、大地の鼓動を体感し、身の回りの環境に目を向けて生活していこうとする意識を持たせたいと考えた。

9 日 程

		活 動 内 容
9/21 (土)	【導入】	<ul style="list-style-type: none"> ・栗駒山麓ジオパークビジターセンターで解説を聞き、ジオパークについて知る。 ・荒砥沢崩落地の見学を行い、岩手宮城内陸地震の被害の大きさや地すべりの仕組みを学ぶ。 ・ゆざわジオパークの説明を聞き、ゆざわジオパークや小安峡大噴湯について学ぶ。
9/22 (日)	【展開】	<ul style="list-style-type: none"> ・栗駒山トレッキングを行い、栗駒山周辺の自然環境を体感する。 (須川高原温泉～名残が原のトレッキングに変更) ・小安峡大噴湯を見学し、大地の鼓動を肌で感じ取る。 ・細倉マインパークを見学し、ジオパークと産業の結びつきについて考える。
9/23 (月・祝)	【まとめ】	<ul style="list-style-type: none"> ・岩石の解説を聞きながら、岩石標本をつくる。 ・3日間の学習を振り返り、ジオパークについて感じたことや今後さらに知りたいことについてまとめる。

10 活動の内容について

【9月21日（土）1日目】「栗駒山麓ジオパークビジターセンター、荒砥沢崩落地見学、ゆざわジオパーク学習」



【9月22日（日）2日目】「小安峡大噴湯見学、栗駒山ミニトレッキング、細倉マインパーク見学」



【9月23日（月・祝）3日目】「岩石標本作り、ふりかえりの活動」



11 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足：83% やや満足：17% やや不満：0% 不満：0%

参加者24名に対して行ったアンケートの集計結果は、全員が満足群であった。総合的にみて非常に好評であったといえる。

(2) 参加者の声

- ・今までジオパークの意味が分からなかったけれど、今回参加してその意味やどんなことをしているのか知ることができてよかったです。
- ・地すべりが1300mの距離を2秒で動く速さだと知って聞いてびっくりした。
- ・マインパークの鉱山には他にどんな石があるかを知りたくなりました。
- ・岩石標本作りのときに「石はこんなところで発見されたんだなあ」と思いながら作業できた。もっと石を調べてみたくなった。
- ・地すべりと土砂崩れの違いを考えたことがなかったけれど、環境探検隊に参加してその違いが分かった。
- ・火山でできた石についてももっとくわしく調べたい。

(3) 成果

- ・栗駒山麓ジオパークと共催することにより、プログラムに合わせた講師やガイドの対応を得ることができた。参加者がより詳しく学ぶことができたと同時に、講師の働きかけによって身の回りの環境と生活を結びつけて考えさせることができた。
- ・今回新たにゆざわジオパークの学習と実地見学をすることができた。栗駒山を取り巻く2つのジオパークと連携することでプログラムに幅を持たせることができるようになった。
- ・各班に学生ボランティアを担当として割り当てることで、参加者に対してより細やかに対応することができた。

(4) 課題

- ・今年度から共催での実施となったが、講師の招聘や経費負担の分担など、事前に確認すべき点が多くあったので、次年度は年度当初に確認した上で事業を計画していく必要がある。

担当：企画指導専門職 高橋 英樹